

ヌガー・グラッセが溶けるまで

越智良知

〔登場人物〕

小林瞳 (28) … 都内の中小企業の事務
足立結憂 (29) … 元歌手。老舗旅館「山浦温泉 あだちや」の女将
足立直政 (31) … 足立結憂の兄
三木典子 (33) … 足立結憂の元マネージャー
斉藤裕次 (29) … 足立結憂の婚約者
吉本圭一 (30) … 足立結憂のファン
高木明希 (30) … 足立結憂のファン
近藤貴之 (28) … 老舗旅館「山浦温泉 あだちや」の従業員

〔舞台〕

雪深い山奥にある老舗旅館「山浦温泉 あだちや」。フロントから客室へ向かう途中にある、休憩スペースが舞台となる。休憩スペースは宿泊客がくつろげる場所として、テーブルと椅子、ソファ、マンガや雑誌などが入れられた棚、そして中央奥にはピアノ、ギターなどの楽器類が備え付けられている。入り口は上手と下手奥の2箇所。上手からはフロントや大浴場、下手奥からは客室などにつながっている。

プロローグ

暗転中。ノイズの混じったニュース報道が流れてくる。

「元歌手、足立結憂さんが自身の経営する老舗旅館「山浦温泉 あだちや」で殺害された事件を受け、警察当局は都内在住の事務職、小林瞳容疑者を逮捕したと発表しました。彼女がこのような凶行に至った背景とされるのは…」

ニュース報道のノイズが増し、明転。舞台中央に小林瞳が座っている。

小林 くだらない。両親が子供の頃に離婚したとか、母親からなにをされたとか、子供の頃にいじめられたとか。じゃあ片親の子供は大人になったら人を殺すの？虐待された子供はみんな必ず人を殺すの？いじめられた人たちは人を殺す運命にあるの？バカバカしい。そんな子供のころの話。調べたいなら、好きに調べてもらっていいけど。私はその話はしない。だって重要じゃないから。知りたいなら教えてあげてもいいけど。でもそれは去年のクリスマス前のことだけ。

小林は立ち上がり、後ろを振り返る。時が止まったような幻想的な明かりに照らされ、足立

結憂を除いた、ともに「山浦温泉 あだちや」で過ごした人物たちが登場し、その風景を演じはじめる。

ノイズに埋もれていたニュース報道の音が聞こえてくる。

「足立結憂さんは15歳で衝撃的なデビューを飾り、22歳にして引退を発表。人気絶頂の最中で引退に、多くの惜しむ声が日本中から集まりました。」

小林 12月7日と8日、私は「あだちや」で2日間を過ごした。足立結憂を殺すために。

小林は鼻歌を歌いはじめる。

小林 私が信じるのは、足立結憂。そしてあの曲…

ニュース報道の音が聞こえてくる。

「足立結憂さんの代表曲は、最後のシングル曲にして最大のヒット曲となった…」

小林 「ヌガー・グラスセが溶けるまで」

強いノイズの音とともに、すべてが暗闇に飲み込まれるように、暗転。

シーン1

外から強い吹雪の音が聞こえている。足立直政が死体のように地べたに転がっている。近くには、イヤホンにつながれたスマホ。補充するお菓子や清掃用具の入ったカゴを持ち、下手奥から従業員の近藤貴之が入ってくる。近藤は気にかける様子もなく、机の上のお菓子の補充や掃除をはじめ。

近藤 死んだんすか？

直政 …。

近藤 死んだんすか？

直政 …。

近藤 直政くん。

直政 …。

近藤 死んだんすか？

直政 …死んだ。

近藤 生きてんじやないすか。
直政 死んだの。もうおれは。
近藤 あ、そうなんすね。
直政 え、むしろ逆に聞くけど。おれ、生きてる？
近藤 僕にはそう見えますけど。
直政 マジでえ。
近藤 はい。
直政 マジかあ。
近藤 はい。
直政 おれ生きてんだなあ。
近藤 そうなんじやないすか。
直政 …じゃあもう、殺してくんないかなあ。いっそのこと。
近藤 えー。
直政 こうなんか包丁とかで、こうグサツと。いやむしろこうロープみたいなもので、グイッと。それかバールのようなもので、ドンドンドンドンドンドンドンドン！
近藤 もうチェックインはじまっていますよ。
直政 いや、おれの話聞いてた？
近藤 ああはい。嫌ですよ。
直政 なんでだよ、やれよ。
近藤 犯罪者になりたくないんで。
直政 なれよ、おれのために。
近藤 いくら負けたんですか？
直政 え。
近藤 競馬。
直政 えー…これくらい？（指を1にする）
近藤 1万円。
直政 なわけ（笑）。
近藤 10万円。
直政 ノンノン。
近藤 マジすか？
直政 マジ。
近藤 バカじゃないすか？
直政 ねえ。
近藤 100万？
直政 イエス。
近藤 ヤバ。もうなにやってんですか、マジで。

直政 絶対いけると思ったんだよ、今回は。

近藤 いつもそうじゃないすか。

直政 今回は本当に本当だったんだって。

近藤 ああはい。

直政 な、死にたくなるのもわかるだろ？

近藤 よくそんな金ありましたね？

直政 あー、まあ。

近藤 え…またどっかで借りてきたんすか？

直政 うん。

近藤 返せるんすか？

直政 そこなんだよなあ…おれ殺されちゃうかも（笑）。

近藤 え、そんなヤバいところで借りたんすか？

直政 これで全部取り返せると思ったんだって。

近藤 ほんとなにやってんすか。

直政 ね。

近藤 女将さんは助けてくれるんですか？前に最後だって言われてましたよね。

直政 まあねえ。

近藤 マジで狂ってますね。

直政 近藤くん、お願いしてみてくださいくない？

近藤 なんて僕が。

直政 あいついま機嫌悪いのよ。

近藤 知らないですけど。

直政 そんなこと言わずに、助けてくださいよ、近藤さん。

旅行カバンやキャリアケースを持ち、従業員の斉藤裕次、宿泊者の吉本圭一、高木明希が上手から入ってくる。

高木 あ、やっぱりここにいた。

直政 あ、いらっしやいませ。

斉藤 フロントに誰もいなかったの、お待たせしてしまっていたんですよ。

直政 あ、そうだったんですか。それは大変申し訳ありませんでした。

吉本 どうせサボってたんでしょ。

直政 いやいや、ちょっと用事がありました…。

近藤 いや、サボってたじゃないすか。おれを殺してくれつつって。

高木 なにやってるんですか（笑）。

直政 お前それは…言うなよ。

高木 相変わらずだなあ（笑）。

直政 ほんと、毎年ありがとうございます。

吉本 当たり前ですよ。もうこれ、僕らにとって恒例行事みたいなもんなんで。

高木 そうそう。足立結憂ファンとして、12月8日はここで過ごさないと。

吉本 デビューと引退の日。明日は一年で一番大事な日ですから。

直政 引退からもう7年も経つのに、こうやって愛してくれるファンがいるっていうのは、本当にありがたい限りですよ。

吉本 僕らは一生ファンですから。永遠ですから、僕らの愛は。

高木 それに私たちお兄さんにも会いに来てるんですよ。

直政 え、マジすか。

高木 クビになってないかって（笑）。

直政 なるわけないじゃないですか（笑）。ね（近藤に）。

近藤 …。

直政 ね（斉藤に）。

斉藤 …はい、そうですね。

吉本 来年はいないかもね（笑）。

直政 ちょっとやめてくださいよ（笑）。

近藤 僕、フロント見ときましようか？

斉藤 あー、近藤さんは大浴場の方お願いしていいですか？

近藤 わかりました。

斉藤 あの、直政さん…そろそろ。

直政 あ、ですよね。

斉藤 はい。もう予約の方はいらっしやらないんですが、念の為。

高木 ちゃんと仕事してくださいね。

直政 当たり前じゃないですか。

高木 （笑）。

直政 では、あさってまで、ごゆっくりお過ごしください。

高木 はい、よろしく願います。

直政、近藤は上手から出ていく。

高木 まあ斉藤さん、悪い人じゃないんで、クビにはしないであげてください（笑）。

斉藤 いや私にそんな権限ないので。

高木 えー、でも結憂ちゃんが婚約したって、あれ斉藤さんのことですよね？

斉藤 あ、見られたんですか？ 雑誌。

高木 もちろんですよ。7年ぶりの結憂ちゃんのインタビューですもん。

斉藤 なんか…すみません。
高木 え、どうかしました？
斉藤 多分、ファンの方にとってはあまり喜ばしい内容じゃなかったと思うので。
高木 いや私は全然。結憂ちゃんがみんなの前に姿を見せてくれたっただけで、私は十分です。
斉藤 すみません、ありがとうございます。
高木 で、どうなんですか？
斉藤 あ、そうですね…はい、私です。
高木 やっぱり！私、前から怪しいと思ってたんですよ（笑）。
斉藤 そうなんですか。お恥ずかしい…。
高木 おめでとうございます！え、結婚式はいつ挙げられるんですか？
斉藤 来年の4月を予定しています。
高木 じゃあもうすぐですね。
斉藤 そうですね。
高木 斉藤さんだったら、私たちも安心ですよ。ね。
吉本 うん…そうだね。
高木 え、なに。
吉本 ああ、いや別に…なんでもないんだけど。
高木 もう、そういうのやめようって言ったじゃん。
吉本 そうだけど。
高木 すみません、斉藤さん。圭一くん、ガチ恋だったみたいで。
吉本 別にそんなんじゃないけど。
高木 じゃあいいじゃん。
吉本 いやいいんだけど。でもあるじゃん、ファンだったら、そういうの。やっぱり本当だったんだっていうか、なんていうか…。
高木 全然わかんない。
吉本 それは高木さんが同じ女だからでしょ。いや…わかっています。いつかこういう日が来るってことはわかってたので…。斉藤さん、本当に、本当に、おめでとうございます。
斉藤 ありがとうございます。
吉本 幸せに…してあげてくださいね。絶対に。
斉藤 はい。
吉本 絶対に。
高木 重っ。
吉本 うるさいな。
高木 （笑）。

外から一層強く吹雪の音が聞こえてくる。

高木 うわ、ほんとぎりぎりだったなあ。

斉藤 今回、山内さんと池本さんは残念でしたね、いらっしやれなくて。

高木 そうなんですよ。2人はやっぱ遠いので、どうしても来られなかったみたいで。

斉藤 毎年4人でお越しいただいたので、私もお会いできるのを楽しみにしてたんですけど。

高木 すみません本当。キャンセル料も融通きかせてもらっちゃって。

斉藤 いえ、この雪ですからしょうがないですよ。30年ぶりの記録的な大雪だって言ってますからね。

吉本 よりによって、こんな日に来なくてもいいのに。

高木 本当、圭一さんと2人なんて最悪。

吉本 そんなのこっちだって、一緒だって。

高木 (笑)。

斉藤 本当に今日はおつかれさまでした。

高木 なんかもうクタクタですよ。

斉藤 今日と明日は、他のお客様もほとんどいらっしやらないので、ごゆっくりされてください。

吉本 そうなんですか？

斉藤 はい。早めにお着きになられたお一人様以外は、キャンセルになってしまったので。

高木 まあ電車も飛行機も止まっちゃいましたしね。

斉藤 本当にあります。こんな山奥までご足労いただきまして。

高木 いや本当、私らは来られてよかったです。

斉藤 ではおつかれだと思っので、そろそろお部屋にご案内しますね。

高木 あ、はい。

斉藤、吉本、高木は下手奥から出ていく。吹雪の音が強く聞こえている。

しばらくした後、足立結憂と三木典子が言い争いをしながら、下手奥より入ってくる。三木は手に雑誌を持っている。

結憂 だから後にしてって。

三木 朝からそんなこと言って、ずっと聞いてくれないじゃない。

結憂 仕事だから。聞くからちゃんと後で。

三木 そう言って、いつも逃げるんだから、私から。

結憂 だって、どうせなに言ったって私の話なんて聞かないでしょ。

三木 聞いてくれないのは結憂の方でしょ。いくら電話したって取ってくれないし。

結憂 だからってここまで来る必要ないでしょ。偽名まで使って。

三木 それは悪かったって謝ったじゃない。

結憂 それってほとんど犯罪だからね。

三木 だから悪かったって。でもちゃんと話がしたかったの。

結憂 もう十分話したでしょ。

三木 話してない。

結憂 これ以上、なにを話せばいいの？

三木 (雑誌を見せ) だからこのインタビュー、なんで勝手に受けたの？

結憂 そんなの私の勝手でしょ。もう三木さんは私のマネージャーでもないんだし。

三木 それはそうだけど。それでもこんなこと話す必要あった？

結憂 だからそれは、そっちが先に仕掛けてきたからでしょ。

三木 …なにを？

結憂 「足立結憂が復活に向け、話し合いを開始」って。

三木 あれは…

結憂 そんな話、私したことあったっけ？

三木 あれは…勝手にあの出版社が書いたことでしょ。

結憂 ほんとに？いまさらそんなこと勝手に書くわけないと思うけど。

三木 知らないわよ、私はそんなこと。

結憂 三木さんたちが書かせたんでしょ。それ以外考えられないんだけど。

三木 でも私たちは関係ないもん。

結憂 ほんとに？

三木 うん…ほんとよ。

結憂 ほんとに？

三木 だから…ほんとだって。

結憂 正直に言っつて。じゃないと2度と三木さんとは話しができないから。

三木 だから…わかったわよ…私が書かせました。

結憂 やっぱり。

三木 どうしても私は結憂に戻ってきてほしいの。だって明日で7年だよ。7年。ずっと私は待ってるんだから。それくらいしたって、しょうがないじゃない。

結憂 しょうがないくない。ルール違反よ、こんなの。

三木 こんなに怒るなんて、思ってたんだもん。

結憂 …。

三木 悪かったわよ…ごめんなさい。

結憂 期待させたつてしょうがないじゃない。もう戻るつもりはないんだから。

三木 でも聞いたでしょ、あなたも。復活を待ち望むファンの声。なんとも思わなかった？こんなに時間が経つても、こんなにたくさんの方が足立結憂を求めてくれてるんだって。

結憂 それはまあ…

三木 うれしかったでしょ？

結憂 それに関しては、ありがたいとは思ったけど。

三木 ほらあ。

結憂 でも私は無理なの。ずっと言ってるでしょ。

三木 ちゃんとサポートする。ここで働きながらだっただけいいし。そこはこっちでちゃんとうまくやらせてもらうから。

結憂 ほら人の話聞かない。

三木 あのね、私も切羽詰まってるのよ。社長が怒ってるの。この雑誌。あなたが勝手なこと言うから。

結憂 まあ私もカツとなって、話しすぎた部分はあると思うけど。

三木 (雑誌を開き) そうでしょ、なんなのよ、これ。もう私は自分を犠牲にしたくないって。

足立結憂は本当の私じゃない、だから私は、2度と誰かのために足立結憂に戻るつもりはないって。

結憂 だから、ちょっと話すぎたと思ってるって。

三木 こんなこと言われたら、私たちがあなたになにか悪いことしてたみたいじゃない。それに足立結憂の歌は、あなたの犠牲の上にあったなんて、ファンが聞いたら悲しむと思わなかったの？あなたが足立結憂を否定するなんて、信じてたファンを裏切ることだと思わなかったの？

結憂 わかってるんだって、そんなの私だって。

三木 あとこれ。あんなのは奇跡だった。私はもう奇跡は起こせないし、起こすつもりもない：

結憂は三木から雑誌を取り上げる。

三木 あ。

ギター横に置かれたゴミ箱に、雑誌を捨てる。

結憂 いいでしょ、もう。そうやってネチネチネチネチ。

三木 すぐ怒るんだから、そうやって。

結憂 こんなわざわざ持ってこないでよね。

三木 まあとにかく、こんなこと勝手にやられて、会社の面目が立たないって、ほんとすごくかっただから。再デビューの話なんてもんじゃない、2度と業界に戻れなくしてやるって言うってんのよ。

結憂 いいじゃない、だったらそれで。

三木 よくないわよ。だから私、説得したから。結憂にデビューの話、OKさせて帰ってきますって。そうしたら、許して、再デビューさせてやってってくれて。呑んでもらうまで、ほんと大変だったんだから。

結憂 なんてそんなにいつも勝手なの。

三木 私はどうしてもあなたに戻ってきてほしいの。

結憂 だから戻らないって言ってるでしょ。

三木 足立結憂は私の人生なの。

結憂 いくらでもいるでしょ他に。

三木 いないわよ、足立結憂の代わりなんてどこにも。

上手からリュックを背負った小林瞳が入ってきている。

小林 あの。

結憂 あ、いらっしやいませ。

小林 あの…泊めてほしいんですけど。

結憂 はい。チェックインはお済みではないですよ？

小林 あ、いや、はい、まだ。誰もいなかったので、あの、入り口に。

結憂 大変失礼いたしました。

小林 ああ、いや。

結憂 本日のご予約はされてらっしゃらないですよ？

小林 あ、はい。でも、あの、お金はあるので。

結憂 はい、ありがとうございます。

小林 泊まりますか？

結憂 はい、大丈夫ですよ。ちょうどこの大雪でキャンセルされたお客様がいらっしゃるので、お部屋は空いております。

小林 じゃあお願いします。

結憂 この大雪のなか、大変だったでしょう。

小林 まあ、はい、なんとか、あの、がんばって。

結憂 本当におつかれさまでした。

小林 あ、はい。

結憂 ではご足労おかけして恐れ入りますが、一度フロントの方でお手続きいたしますね。

結憂は小林を案内し、上手から出ていこうとする。

小林 あの。

結憂 はい。

小林 サインほしいんですけど（と「ヌガー・グラスセが溶けるまで」のCDをリュックから取り出す）。

結憂 あ、ありがとうございます。懐かしいですね、CDまでわざわざ。

小林 私、ファンなんです。足立結憂、さんの。あの、とくにこれ、「ヌガー・グラスセが溶け

るまで」は私の一番好きな歌で。言葉すべてが私に語りかけてくれるような気がして、私の人生を変えてくれた曲でもあって、だからこれにサインしてもらいたくて。

結憂 ありがとうございます。

小林 ああ、いえ。じゃあこれ（とCDとペンを渡す）。

結憂 準備万端ですね（笑）。

小林 はい、途中で買ってきたんで。

結憂は小林からCDとペンを受け取り、サインを書き始める。

結憂 あ、お名前もお書きしましょうか？

小林 じゃあ、お願いします。

結憂 お名前伺ってもよろしいですか？

小林 はい、小林瞳です。

結憂 小林瞳さん。

小林 はい。小林瞳です。

結憂 小林瞳さん。

結憂はCDに名前を加える。

結憂 （CDを手渡しながら）はい、できました。

小林 あ、ありがとうございます。

結憂 いえ全然。こちらこそ、ありがとうございます。

小林 あ、はい。ありがとうございます。

小林は結憂のサインと自分の名前の入ったCDを、うれしそうに眺めている。

シーン2

小林はCDを手に、鼻歌で「ヌガー・グラスセが溶けるまで」を歌っている。側には背負ってきたリュック。鼻歌に耳を傾けながら、近藤と吉本が話している。

近藤 いや聞いたことあるんですよ。

吉本 しっかりしてくださいよ、近藤さん。

近藤 曲名は…なんだっけなあ。

吉本 足立結憂、最後にして最大のヒット曲ですよ。

近藤 へえ、そうなんですね。

吉本 日本で100人に聞いたたら、99人は答えられますよ。

近藤 そうなんですか？

吉本 わかんないですけど。

近藤 あー、やっぱ出てこないですね。

吉本 いいんですね。わからないでいいんですね。

近藤 あ、はい。

吉本 …小林さん、じゃあ正解発表お願いします。

小林 ドウルルルルルルルル、ドウン（ドラムロールとともにCDのタイトルを見せる）。

近藤 「ヌガー・グラッセが溶けるまで」。あ、そうでしたそうでした。

吉本 そうでしたじゃないですよ。ほんと、なんのために働いてるんですか、ここで。

近藤 お金のためですかね。

吉本 もったいない。お金のためなんて。もったいない。

近藤は小林のアピールに気づき、

近藤 あ、これサインですか？

小林 はい。私のために書いてくれて。あのこれ、私の名前まで書いてくれたんですけど。わかります？これ。小林腫って、私の名前なんですけど。

近藤 あ、ほんとですね。

小林 ここまで普通してくれないですよね？書きましようか？ってわざわざ聞いてくれて。足立結憂、さんの方から。絶対普通はここまでしないとと思うんですけど。

近藤 そうかもしれないですね。ちょっとわかんないですけど。

小林 そうですよ、絶対に。

近藤 なにがそんなにいいんですかね？僕なんかあんまりわかんないですよね。

吉本 え、それあなたが言っちゃうんですか？

近藤 え、ダメですか？

吉本 いや一緒に働いてますよね？

近藤 まあはい。何ヶ月かですけど。

吉本 そうですよね。

近藤 あ、はい。

吉本 いや別にいいんですけど。

近藤 あ、はい。

小林 どうやって生きてるんですか？近藤さんは。

近藤 いや別に普通ですけど。

小林 足立結憂の歌をちゃんと知らないまま生きられてるなんて、不思議ですよ。

近藤 そうですか？

小林 はい、すごいです。

近藤 まあそもそも音楽自体あんまり聴かないっていうか。映画だったらそこそこ詳しいんですけどね、けっこう観てるんで。

小林 やめましょう、そんなの、映画なんて。

近藤 観ないんですか？映画。

小林 観ないです、だってなんの意味もないじゃないですか、映画なんて。インチキでしょ、全部。嘘の世界のなかで、偽物の演技に酔いしれてる役者をみてるなんて、吐き気がします、正直言ってます。

吉本 小林さん、めちゃくちゃ言いますね（笑）。

小林 でも足立結憂の歌は本当なので。そうですね？

吉本 あ、はい、そうですね。結憂ちゃんの歌だけは、絶対に本当です。

小林 あ、近藤さんも買いにいきましょう、CD、足立結憂の。

近藤 あ、はい。

小林 今日。

近藤 ああいや、今日は無理ですよ（笑）。

小林 どうしてですか？

近藤 夜まで仕事ですし。それにこの雪だから、出られないですよ、ここから。

小林 じゃあ、買いに行くって言いましょ。絶対に、

近藤 ああ、はい。

小林 足立結憂のCDを買いに行く。

近藤 あ、はい。

小林 やるべきことは言葉にすれば、叶えられるので。

近藤 そうなんですね。

小林 絶対に足立結憂のCDを買いに行く。

近藤 絶対に足立結憂のCDを買いに行く。

小林 絶対に足立結憂のCDを買いに行く。

近藤 絶対に足立結憂のCDを買いに行く。

小林 はい。これで絶対に、近藤さんは足立結憂のCDを買いに行きます。

近藤 そうですね（笑）。

吉本 小林さん、ほんとファンの鏡ですね。

小林 近藤さんもこれでちゃんと人生を生きていけると思います。

近藤 いや僕、ちゃんと生きてるつもりなんですけど（笑）。

吉本 （笑）。

湯上がり姿の高木、三木が上手より入ってくる。

吉本 あ、高木さん、やっと出てきた。

高木 ねえ、圭一くん。誰だと思う？この人。

吉本 え、いきなりなに（笑）。

高木 いいからいいから。

吉本 え、会ったことあります？

三木 あー、もしかしたら。

吉本 あ、結蔓ちゃんのファンですか？

高木 惜しい！けど、遠い。

吉本 え、なにそれ（笑）。

高木 わかんないかなあ、これで。

吉本 いやわかんないよ。

高木 驚くよ、絶対。

吉本 えー、うそ、なに。

三木 足立結蔓のマネージャーをやっていた、三木です。

吉本 え、ほんとですか?!あの三木さん?

三木 はい。知ってくれてたんですか?

吉本 当たり前じゃないですか!ここで会えるなんて、僕…泣きそうです。なんか…感動してません。

三木 そんな大げさな（笑）。

吉本 大げさじゃないですよ!だって足立結蔓を世に送り出したのは、三木さんじゃないですか。小林さん、三木さんですよ。

小林 あ、はい。

吉本はギタースタンドに立てかけられたギターを手に取り、

吉本 このギターですよね?結蔓ちゃんが弾いてたのって。

三木 はい。

吉本 そうなんですそうなんです。昔、このギターで、結蔓ちゃんがお客さんの前で歌ってたんですよ。それがたまたまニュースで流れて、たまたま三木さんが観てたんですよ?

三木 そうですね。

吉本 あ、小林さんも触ってみます?

小林 あ、はい。

小林は吉本から唐突にギターを渡され、恐る恐る手にし、観察している。

吉本 あのととき三木さんがニュースを観てなかったら、足立結蔓はいなかったわけですから。

本当に：ありがとうございます…僕たちと結憂ちゃんを出合わせてくれて…。

高木 いつか三木さんに会ったら、お礼言うんだって言ってたもんね。

吉本 そうなんです。こんなところで会えるなんて、ほんと突然で、なに言ったらいいかわからないんですけど、本当にありがとうございます。ありがとうございます。

三木 いえ、もうそんな（笑）。こちらこそですよ、足立結憂をずっと愛してくれて、本当にありがとうございます。

吉本 あの…はい。

三木 （笑）。

近藤はやるべきことを終え、下手奥から出て行こうとしている。

吉本 もう近藤さん、三木さん泊まってるなら言ってくればいいのに。

近藤 お客様のことを、あまり口外できないので。

吉本 意外に真面目だなあ（笑）。

近藤 意外になってなんですか。僕は至って普通に真面目ですよ。では失礼します。

近藤は下手奥から出ていく。

吉本 （高木を紹介し）あ、小林さん、結憂ちゃんファンです。

高木 高木です。

小林 高木さん。

高木 はい。

小林 あの、小林です。

三木 さっき、結憂にサインもらってましたよね？CDに。

小林 あ、見てたんですか？

三木 隣にいましたから（笑）。

小林 え、そうなんですか。すみません、なんか気づかなくて。

高木 はじめてですか？結憂ちゃんと会うのって。

小林 はい。あの、もちろんCDは全部持ってるし、全部何万回も私は聞いているんですけど。

高木 夢みたいじゃないですか？こんな近くで話せるって。昔なんかライブ行っても、ほんと遠くに見えるだけでしたしね。

小林 ああ、はい、そうですね。

高木 私もはじめてここで会ったときは、なんか泣いちゃいましたもん。

吉本 あれ、ちょっと引いたし、マジかと思って（笑）。

高木 圭くんもめちゃくちゃだったじゃん。挙動不審で（笑）。

吉本 え、そうだっけ。

高木 うん。

吉本 あ、そう。

高木 やっぱり私もまだちょっと緊張しますが、何回も会ってたら、なんとか普通に話せるようになりました(笑)。

小林 あ、そうなんですね。

高木 はい。

斉藤が下手奥より入ってくる。

斉藤 あれ、皆さま、お揃いなんですね。

吉本 あ、そろそろ夕食の時間ですか？

斉藤 はい、ご用意できました。

吉本 待ってました！

高木 私、一回部屋戻ってから行こうと思うんだけど、そのまま行く？

吉本 おれはそのまま行こうかな。

高木 じゃあちょっと待ってて。

吉本 うん。

高木 あ、三木さんと小林さんもよかったら、一緒にどうですか？ 私たちお食事処の方で食べようと思ってるんですけど。

吉本 そうだね、せっかくだし、よかったら。

三木 いいですね。部屋で一人で食べるのも寂しいなって思ってたんですよ。

高木 でしょでしょ。

吉本 小林さんはどうですか？

小林 じゃあ私も行きます。

高木 あ、よかった。大丈夫ですかね？

斉藤 大丈夫ですよ。お食事処の方でお伝えいただければ、皆さまの分、ご用意させていただきますので。

高木 ありがとうございます。

斉藤 私も後ほど伺わせていただきますね。

高木 はい。

吉本 あ、斉藤さん、結憂ちゃんって今日は忙しいんですかね？

斉藤 そうですね。女将はこの大雪の対応で、少しバタバタしているようですよ。

吉本 そうなんですね。

斉藤 なにかご用でしたか？

吉本 ああいや、全然。今日はちょっと見かけないなあと思っただけなんですけど。

高木 ちょっと前に着いたばかりじゃん。

吉本 わかってるよ。すみません、ちょっと気になっただけなんで。

斉藤 申し訳ありません。もう落ち着くと思いますので、後ほどご挨拶に伺わせます。

吉本 いや全然、僕は明日会えればいいんで。あのほんとに、暇になったらとか、ほんとそんな感じで大丈夫なので。

斉藤 はい。

小林はギタースタンドにギターを戻す。と、その隣に設置されたゴミ箱に捨てられている雑誌に気づく。手に取り、それを見ている。

高木 (小林の様子を見て) あれ、どうしました？あ、それ結憂ちゃんがインタビューされてる雑誌ですよ。

小林 ああ、はい。

高木 持ってきてたんですか？

小林 いや、あの、この中に(ゴミ箱を指し)。

三木 すみません、それ私のです。

吉本 なんて捨ててるんですか(笑)。

三木 いや結憂に捨てられちゃったんですよ。

吉本 なんてですか(笑)。

三木 あー、ちょっと結憂に怒っちゃったんですよね。なんでこんなインタビュー受けたのって。

高木 そうなんですか？

三木 ほんと困ってるんですよ、私らも。嘘ばかり書かれちゃって。雑誌なんてそんなもんだって、結憂には言ってたはずだったんですけど。

小林 じゃあ、ここにある言葉は、全部嘘なんですか？

三木 え、ああ、そうですね。

小林 そうですよ、嘘なんですよね、全部。

三木 そうですよ、嘘ですよ、全部。

小林 私たちの知ってる足立結憂が本物で、ここにいる足立結憂は偽物なんですよ？

三木 あ、はい、そうですね。

小林 信じていいんですよね？私は足立結憂を。

三木 はい、もちろんです。

小林 あの、私、足立結憂が変わっちゃったのかと思って、苦しくて、信じれなくなっちゃって。でも私、実際に会ったらそんなことないんじゃないかって。信じていいんですよ、私は足立結憂を。足立結憂と足立結憂の歌は、ずっと私の本物だって、信じていいんですよ。

三木 はい。ずっと信じてあげてください。

小林 ありがとうございます。よかったです、よかったです、本当に私。

吉本 よかったですね、小林さん。

小林 はい。

吉本 まあ僕は、嘘ばかり書いてるなど思ってたんですけど。

高木 いやショック受けてたじゃん。

吉本 いやそれは、婚約したって書いてたから。

斉藤 すみません。

吉本 ああ、いや別に、全然いいんですけど。あの、おめでとうございます。

高木 さっき言ったから、もういいよ。

吉本 ああうん、まあ一応ね、一応。

高木 (笑)。

吉本 じゃあそろそろ行きますかね？

小林 はい、もう大丈夫です。

三木 あの、すみません、ちょっと私、仕事の電話しなきゃいけないの思い出して。

吉本 そうなんですか？

三木 先に行ってもらった方がいいですか。終わったら向かうので。

吉本 わかりました。じゃあお待ちしますね。

三木 はい、すみません。

小林、吉本、高木は下手奥より出ていく。斉藤、三木の2人が残る。

斉藤 では三木さんも、ご用がお済みになられたら、お食事処にお越しください。

三木 斉藤さん。

斉藤 あ、はい。

三木 ちょっとお願いがあるんですけど。

斉藤 なんでしょうか？

三木 斉藤さんにしかお願いできないことなんですけど、聞いてくれますか？

斉藤 はい。…あの、要件がわからないと、なんとも言えないんですが。

三木 結憂が歌手に戻ってくれるように、説得してくれませんか。

斉藤 えっと、それは私に言われても困りますよ。

三木 でも私がいくら言ったって聞いてくれないんですよ、あの子。斉藤さんが説得すれば、戻らうって言うかもしれないじゃないですか。

斉藤 でもそれは、私が話すことじゃないじゃないですか。

三木 斉藤さんの話すべきことですよ、これは。だってあさってまでに結憂が歌手に戻るって言ってくれなかったら、再デビューの話はなくなっちゃうんですよ？

斉藤 それは知らないですけど。

三木 さっきの見ましたよね？あんなにずっと愛してくれているファンがいるんですよ。あれを見てなにも思わなかったんですか？

斉藤 ありがたいなと思いますけど。

三木 ですよね。ああやって足立結憂を愛して、待ち望んでいる人たちが日本に何百万人という人ですよ。いいんですか？ 斉藤さんは。そういう人たちの願いが一生叶えられないことになって

も。

斉藤 それはでもしょうがないじゃないですか。

三木 しょうがないって。それ斉藤さんの責任になりますよ？

斉藤 なんて私の責任になるんですか。

三木 だって結憂が一番近いのは斉藤さんでしょ。説得できる可能性があるのにやらなかったら、そこには責任が発生するじゃないですか。

斉藤 しませんよ。

三木 想像してみてください。いつか足立結憂が戻って来てくれると信じて、年老いていくファンの姿を。目の前で死を間近に迎えている人が、ああ最後に足立結憂がステージに立った姿を一目見たかったと言って死んでいく姿を。想像してみてください。ああ、この人たちの人生の喜びを奪ってしまったのは私かもしれない。私がああとき説得していれば、もしかしたらこの人たちはもっと楽しい、生き生きとした人生を送っていたんじゃないだろうか。そうやって思いませんか？

斉藤 …… 思いませんよ。

三木 いや絶対思いますよ。だって斉藤さんは、そういう責任があるんだってことを知っちゃったから。

斉藤 責任だと思っただけ。

三木 いまはね。でもこの先はどうなるかわかりませんよね。ああ、ああときやってあげばよかったって後で後悔するよりは、一応話すだけ話しておけば、言い訳になるとは思いませんか？ 自分の心の。

斉藤 そんなの別に…

三木 反対なんですか？ 結憂が歌手に戻ることに。

斉藤 別に私は反対とか賛成とかないですけど。結憂がやりたいようにやってくれればいいかなってだけで。

三木 じゃあお願いします。

斉藤 なんてそうなるんですか。

三木 だって別に斉藤さんにデメリットはないじゃないですか。ただ歌手に戻ってみる道もあるんじゃないかって話すだけなんです。

斉藤 いやでも。

三木 それに結憂もいつか絶対後悔します。あの子は強情張ってるだけなんです。頑固なんです。私にはわかるんですよ。だって15歳のときから、あの子をずっと見て来たんだから。

斉藤 ……

三木 いつか後悔しないように、いまちゃんと伝えてあげるっていうのも、優しさじゃないです

か？

齊藤 それは…。

三木 じゃあお願いします。齊藤さんなりのやり方でいいんで。

齊藤 やるなんて言っていないじゃないですか。

三木 大丈夫です、齊藤さんは優しいから。絶対やってくれるって信じてるんで。

齊藤 やりませんよ。

三木 お願いしますね。

齊藤 やりませんよ。

三木は下手奥から出ていく。齊藤一人になる。

齊藤 なんなんだ、あの人。

齊藤はいま話された内容を咀嚼している。そこに言い争いをしながら、結憂と直政が上手から入ってくる。

直政 お願いだって。

結憂 前回で最後だって言ったでしょ。

直政 (齊藤を見つめ) あ、ねえ裕次くんからも頼んでよ。

齊藤 どうしたんですか？

直政 ちょっとお金工面してくれないかって。

齊藤 また借金したんですか？

直政 まあ、うん。ちょっと。

齊藤 ちょっとって、いくらですか？

直政 まあ、800、くらい。

齊藤 800円ですか？

直政 またまたあ(笑)。

結憂 笑い事じゃないでしょ。

直政 当たり前だよ、笑い事じゃないんだよ。おれ死んじゃうよ、殺されちゃうよ、いいの？

結憂 殺されればいいじゃん。死んじゃえればいいじゃん。

直政 いやひどくない？兄に対して。たった一人の肉親だよ。

結憂 いいよ、こんな兄、私いらんから。

直政 傷つくー。いらんって、ひどくないですか？

齊藤 …。

直政 お前に音楽教えてやったのは誰だよ、おれだろ。

結憂 いつの頃の話してんのよ。

直政はギターを手に取り、

直政 このギターで、これがGでこれがGで、これがF、F、F…(うまく押さえられず)ああもう、だからそういうの。手取り足取り教えてやったのは誰だよ、おれだろ。

結憂 だからなんなの？いまの話に関係ある？

直政 あるある、大あり。だって、それでお前は大金稼げたわけだから。その10%、いや20%くらいはおれに還元してくれてもいいんじゃない？

結憂 …。

直政 ねえ裕次くん、そう思わない？

斉藤 いやどうなんですかね。

直政 ずるいんだって、お前だけ。東京でいい生活して、ちやほやされて。母さんの面倒最後まで見てたのはおれだぞ。こんな田舎から一步も出ずに、おれがどれだけ大変だったか、お前知らないだろ。

結憂 わかってるよ、そんなこと。

直政 いやわかってないね。だってお前は15で出ていってから、母さんが死ぬまで、ろくに帰ってきもしなかったんだから。

結憂 それはお母さんが帰ってくるなって言ってたから。

直政 それはお前が悪いんじゃない。高校は卒業して行けって、あんなだけ母さんが反対してんのに、強行突破で東京行くから。

結憂 あのとときはそれしかないと思ったから…。

直政 東京から電話かけてきたとき、母さんがどれだけ怒り狂ったか。

結憂 わかったって、それは。

直政 それで最後にも帰ってこないって、どんだけ親不孝なんだよ。

結憂 それはでも…だから、後悔してるんだって。だから戻って来たんでしょ、ここに。

直政 意味ない意味ない、いまさらそんなことしたって。なにかするべきなのは、生きてる人間にしないと。死んだ人間のためになにかやったって、そんなの自己満足でしかないから。

結憂 じゃあ、どうしろって言うのよ。

直政 だからお金ブリーズってこと。お金もらえたら、おれはちゃんとハッピーだし、ちゃんとお前に感謝するし。

結憂 別にお兄ちゃんからの感謝なんかいらんわよ。

直政 じゃあ感謝しないからちようだい。

結憂 なに言ってるの？

直政のスマホのバイブ音が鳴る。

直政 (スマホを見て) ああもう、お金くれるの？くれないの？

結憂 だから言ってるでしょ、あげません。

直政 お前一生後悔するからな。おれ死ぬぞ、1週間後には。お前の前からいなくなるぞ。

結憂 好きにしたら？

直政 なんだよ、お前。人がこんなに頼んでんのに。絶対後悔すんなよ。

結憂 もうわかったから。

直政 絶対後悔すんなよ。

結憂 …。

直政 ああもう。

スマホのバイブ音に焦りながら、直政は下手奥から出ていく。

結憂 ごめんね。

斉藤 ああ、いや。

結憂 どうしたらいいんだろ。

斉藤 そうだなあ。

結憂 今回助けてあげても、結局また一緒でしょ。

斉藤 多分ね。

結憂 うーん…。

斉藤 殺されるって、あれ本当なのかな？

結憂 いつも言ってることでしょ。

斉藤 まあそうかな。

結憂 知らないけど。

斉藤 うーん…。

結憂 …。

斉藤 …あのさ。

結憂 うん？

斉藤 三木さんに再デビューについて誘われてるのって。どうするの？

結憂 え、なんで？

斉藤 ああ、いやどうなのかなって。なんか今回が最後だって、言われてるみたいなこと聞いたから。

結憂 ああ、なんか雑誌見て、社長が怒ってるみたいで。三木さんがなんか言ってた？

斉藤 ああいや、まあ。

結憂 ほんとあの人、昔から勝手なんだよね。戻らないって言ってんのに。

斉藤 いいの？断っちゃって。

結憂 うん。だってもう私戻るつもりないもん。

斉藤 「あだちや」のことだったら気にしなくていいよ。従業員雇えばなんとかかなると思うし、別にずっと向こうにいなきゃいけないわけじゃないんでしょ？

結憂 そうだけど。

斉藤 これだけ待ってる人がいるんだったら、できる範囲で活動してもいいかなって思ったんだけど、もちろん結憂がやりたいんだったら。全然サポートはできるし、いられるときは働いてくれるっていうんでもおれは全然。

結憂 そういうことじゃないの。そんな資格ないのよ、私には。

斉藤 そんなことないと思うけど。

結憂 それにもう私は…うん、ごめんね。

斉藤 いや後悔しないんだっいたらいいんだけど。

結憂 うん。三木さんには私から言っておくから、変なこと言わないでって。

斉藤 まあ三木さんも、結憂に戻ってもらいたくて必死なんだよ。

結憂 それはわかってるけど。

斉藤 あ、吉本さんたちにご挨拶してもらっていいかな？話したそうだったから。

結憂 あ、そうだね。今日のご挨拶できてなかったな。

斉藤 まあこの雪だからね。

結憂 早く止まないかなあ。

シーン3

夜。休憩スペースは薄暗い灯りに切り替わっている。吹雪の音は遠くに聞こえ、部屋は穏やかな佇まい。小林はリュックを背負い、ヘッドホンをポータブルCDプレイヤーにつなぎ、音楽を聞いている。少し部屋のなかを物色しながら、ギターを手に取ろうとする。近藤が入ってくる。

近藤 なにやってるんですか？

ヘッドホンの音にかき消され、小林には聞こえない様子。近藤は近くに近寄り、再度声をかける。

近藤 なにやってるんですか？

小林 うわあ！

近藤 あ、すみません。

小林 なにやってるんですか、近藤さん。

近藤 いや僕が聞いてたんですけど。すみません、聞こえなかったみたいなんで。

小林 あ、すみません。

近藤 なに聴いてるんですか？

小林 あ、ええと…

と、小林はポータブルCDプレイヤーから、CDを取り出そうとする。

近藤 ええ、ちょっと懐かしくくないですか。これ。

小林 そうですか？

近藤 こんないま見たことないですよ、使ってる人。

小林 そうなんですネ。

近藤 まだ売ってるんですネ、これ。

小林 ああ、はい、普通に。

近藤 絶滅したのかと思ってました。

小林 まあけっこう前に買ったやつですけど。

近藤 へえ。

小林 聴いてみますか？

近藤 ああ、いや、大丈夫です。

小林 聴いてください（と近藤にヘッドホンを押しつける）。

近藤 ああ、はい。

近藤は小林からヘッドホンを受け取り、流れている曲を聞く。

近藤 「ヌガー・グラスセが溶けるまで」ですよネ。

小林 正解です。

近藤 さつき聞いたとこなんで、まだ覚えてます。

小林 あ、よかったです。

近藤 ほんとに好きなんですネ。

小林 好きとかそんなものじゃないですよ、すべてです、私の、すべてです。

近藤 いいですね、なんかそういうの。僕、ほんとに好きなものとか人とかないんで、うらやましいです、なんか普通に。

小林 そうなんですか？

近藤 はい。だって特別な存在があるってことじゃないですか。僕はそういうのないうんで、大事なものが自分だけっていうか。なんかそれって、すごいさみしい人間なんじゃないかって思ったりするんですよ。

小林 へえ。

近藤 悩みです、最近の。

小林 大丈夫です、見わかりますよ、近藤さんも。

近藤 見つかりますかね？

小林 見つかりますよ、絶対。運命なんで、そういうのって。

近藤 そうですか？

小林 神様が与えてくれるんです、必要な人に、必要なときに。だって私もこの歌と出会わなかったら、生きられてなかったから、絶対に。

近藤 そうなんですか？

小林 あの…私、死のうと思っただんです、いや一回死んだんです、私。偽物しかないこの世界で生きるのが嫌になって。だってそうじゃないですか。本物の言葉なんてない、一つも。自分勝手に調子のいいこと言って、裏では悪口言ったり、好きとか愛してるとか、そんなのも嘘ばかり。こんな世界で生きてたって、ただ苦しいだけじゃないですか。

近藤 そうですかね。

小林 そうですよ。歌だってそうじゃないですか、耳障りのいい言葉をただ並べるだけで、本物の言葉なんてひとかけらもない。でも…足立結憂の言葉だけは違った。ヌガー・グラッセが溶けるまでを聴いたとき、私、涙が止まらなかったんです。これは私のためにつくられた歌なんじゃないかって。

近藤 へえ。

小林 偽物の人たちに騙されて、苦しんで、でもたった一人の本物の言葉に救われた。足立結憂の心の叫びを歌った歌なんです。ヌガー・グラッセは象徴なんです。たった一つだけ残された、本物の言葉を証明するもの。このヌガー・グラッセが溶けるまで、私は生きていける。だからこのまま溶けてなくならないように、このたった一つの本物が消えてしまわないように。この一つの本物があれば、こんな世の中でも生きていけるんだって。そういう歌なんです。

近藤 そういう歌だったんですね。

小林 これが私にとつての本物だって、世の中に本物の言葉があったんだって。私は見つけれられませんでした。足立結憂の言葉と足立結憂に出会えた。これがあれば私は生きていける。これって、神様が私に生きろって言ってくれたんじゃないかって思っただんですよね。

近藤 なんか、いいですね、なんか。

小林 だから近藤さんも、見つかりますよ、いつか絶対。

近藤 そうなんですかね。

小林 はい、絶対に。

結憂が下手奥から入ってくる。

結憂 こんにちは。

小林 あ、はい、あの、こんにちは。

結憂 なにかお話しされてたんですか？

近藤 女将さんの歌との出会いを聞いてました。

結憂 え、そうなんですか。

近藤 めちゃくちゃ熱い話でしたよね。

結憂 ええ、そうなんですね。

小林 まあ、あの、はい。足立結憂、さんの歌は私のすべてなので。多分、出会えてなかったら私は生きてなかったと思うのでいま、あの絶対。だから足立結憂、さんは私の恩人みたいなものだったりもして、だから、あの、聴いています、これ、ちゃんと、毎日。

小林は「ヌガー・グラスセが溶けるまで」のCDケースとCDプレイヤーを、結憂に見せる。

結憂 え、懐かしいですね、それ。

近藤 それ僕も言いました（笑）。

結憂 そうなんだ。

小林 足立結憂、さんの歌は本物だから、ちゃんとこれで聴ききたくて。CDで聴かない歌って、私、本当じゃない気がするの。

近藤 すごいこだわりですよ。

小林 だって、形がないものって、信用できないじゃないですか。本当に存在してるのか、してないのか、わからないし。だから、こうやって、ちゃんと聴きたくて。

結憂 ありがとうございます。

小林 ああ、いや。

近藤 僕も聴いてみようかと思ってるんですよ、ちゃんと。

結憂 いいよ、別にいまさらそんなの。

近藤 でも、小林さんと約束したんで、CD買いにいくって。

結憂 そうなの？

近藤 はい。

小林 あの、でも、すみません。あの、私、嘘つきました。毎日聴いてなかったです、私。

結憂 ああ、そんなの全然。

小林 雑誌見たんです、インタビュー。そしたらこの歌がなんか全部、偽物だったんじゃないかって思ってしまった。そしたらなんかもう、聴けなくなっちゃって。久しぶりに聴いたんです、いま、私。

結憂 そうなんですね。

小林 すみません、私が悪いんです。あんな偽物の足立結憂に騙されちゃったから。足立結憂が足立結憂を否定するわけないのに。足立結憂は本物の言葉で私に生きていていいんだよって、私を救ってくれた、あの頃のままなのに。あんな言葉を話す足立結憂が、本物であるはずがないのに。

結憂 …。

小林 でも私、ちゃんと足立結憂、さんに会ってわかりました、やっぱり変わってないんだって。いまでもちゃんと私の信じる本物の足立結憂なんだって。

結憂 …すみません。

小林 ああ、いや、本当に、これは私が悪いので。三木さんも言うてました。雑誌は嘘ばかりだって、あそこに書かれた言葉は全部嘘だって、あそこにいる足立結憂は偽物だって。だから大丈夫です、もう私は。いまでも本物の足立結憂がちゃんといたんだって、わかったから。

結憂 すみません。

小林 あ、いや、本当、全然。

結憂 …。

小林は結憂に想いを話せた興奮と照れ臭さに感じ入っている様子。

結憂 …本物の足立結憂ってなんなんでしょうね。

小林 え。

吹雪の音が強くなる。同時に、木が軋むようなミシミシという音が部屋に聞こえ、徐々に強くなっていく。

結憂 あの、すみません。引退して7年も経ってるからか、私もちょっとわからなくなっちゃってるんですかね。

小林 足立結憂は足立結憂じゃないですか。

結憂 そうですね、でも雑誌で話していた私も本当なんです。もちろん、あんなこと話すべきじゃなかったって反省してるんですけど。

小林 でもあんなのは全部嘘だって。

結憂 全部本当です。そういうことを思ってる人間でもあるんです。失望させてしまっただけに申し訳なく思ってるんですけど。でもやっぱりあれば、私がいま思ってることなんです。

小林 嘘。なんで、そんなの…

結憂 こんなことわざが話すことではないと思うんですけど、でもやっぱりずっと好きでいてくれる人には、わかってもらいたいなど思ってしまうんですよね。こんな私でも好きでいてくれないかなって。

重い、なにかが落下したような、ガタンという音が聞こえる。

近藤 あのこれ、大丈夫ですかね？

結憂 ごめん、ちょっと見えてきてもらっていいかな？

小林 偽物なんですか？足立結憂は。

近藤 わかりました。

近藤は上手から出ていく。

小林 偽物なんですか？足立結憂は。

結憂 わかりません。でも、全部ひっくるめて私なんです。

小林 ……こんなの足立結憂じゃない。

結憂 こんな私でも、愛してもらいたいというのは勝手ですかね。

小林 ……

結憂 すみません、こんなの話すことじゃなかったですよ。

小林 ……

結憂 いまおかしなところがないか確認してまいりますので、なにか不具合があれば、すぐにご報告させていただきます。大変申し訳ございません。

小林 ……

結憂は上手から出ていく。小林一人になる。

小林 偽物に侵食されてる。

小林はヘッドホンを耳にあて、足立結憂の歌で耳をふさぐ。が、すぐにその音を拒絶するよ
うに、ヘッドホンを外し、乱暴に放り投げる。リュックの中からなにかを探し、取り出そう
とするが、踏みとどまる。CDプレイヤーから、「ヌガー・グラスセが溶けるまで」のCDを
取り出し、ケースにしまう。それをしばらくながめ、ゴミ箱に捨てる。吉本と食べかけのア
イスを手にした高木が、慌ただしく入ってくる。

吉本 あれ、小林さん起きてたんですか。

小林 はい。

高木 大丈夫ですかね？これ。

吉本 一応、確認してきましたんですけど。

高木 なにか聞いてますか？

小林 わかりません。

高木 あ、そうなんです。

吉本 誰かいるかな？

高木 いるでしょ。

吉本 じゃあおれ、ちょっと聞いてくるよ。

高木 ああ、うん。

吉本は上手から出ていく。小林と高木の2人になる。

小林 …偽物になっちゃったんですかね？足立結憂は。

高木 え。

小林 さつき、雑誌で書いてた言葉は全部本当だって。

高木 あ、そうなんですか。

小林 昔と同じ、本物なんだって信じたのに。

高木 本物じゃないですか、結憂ちゃんは。

小林 違います。

高木 なんですですか？

小林 足立結憂はあんなこと言わないじゃないですか。もう私のために歌うつもりはないって。そんなこと言うはずないじゃないですか。

高木 私もそれはちよっとショックでしたけど。

小林 そうですよ。

高木 でも結憂ちゃんも人間だから、いろいろ考えるところがあるんですって。

小林 それでも本物だったら、そんなこと言わないです。

高木 見守ってあげましょうよ、ファンじゃないですか。どんなになっても結憂ちゃんは結憂ちゃんですよ。

小林 本物じゃないんだったら、意味がないです。本物じゃないんだったら、この世にいるべきじゃないです。

高木 …なに言ってるんですか？

小林 …すみません。

高木 …つかれてるんじゃないですか。こんな雪のなかでここまで来たし。

小林 そうなんですかね、つかれてるんですかね、私。

高木 そうですよ。ゆっくり休んでください。明日になったらまた変わって見えますよ。

小林 そうですかね。

高木 そうですよ。

小林 じゃあ、おやすみなさい。

高木 はい。ゆっくり休んでください。

小林は下手奥から出ていく。少しして、吉本が上手から入ってくる。

吉本 どんな状況か、いま確認してるみたい。

高木 あ、そうなんだ。

吉本 あれ、小林さんは。

高木 部屋戻ったよ。

吉本 あ、そうなんだ。

高木は小林が出て行った方を確認して、

高木 小林さん、やっぱちょっと変わってるわ。

吉本 なんかあったの？

高木 結憂ちゃんが偽物になった、とか言ってる。

吉本 ああ、昼も言ってたじゃん。

高木 本物じゃないんだったら、この世にいるべきじゃない、とか言ってるんだよ。

吉本 は、なにそれ。

高木 なんか結憂ちゃんが、雑誌で話したことは本当だ、って言ってたみたいで。本物とか偽物とかどうでもいいでしょ。感動させてくれたっていうのは、本当なんだから。

吉本 そうだよ、ファンだったら、結憂ちゃんがどうなったって愛すものでしょ。

高木 え、でも、婚約したっていうのは、大丈夫なの？

吉本 ああ、全然関係ないね。

高木 ショック受けてたくせに。

吉本 まあそれは。

高木 今年も書いてきたの？手紙。手書きの。

吉本 そりゃそうでしょ。おれは死ぬまで続けるから。

高木 あ、そうなんだ(笑)。

近藤が忙しげに、上手から入ってくる。

近藤 ご心配おかけしてすみません。朝までには直しておきますので。

吉本 あ、わかりました。ありがとうございます。

近藤 すみません、ちょっと古くて。

吉本 ああ、いえいえ。

近藤は下手奥から出ていく。

高木 戻ろっか。

吉本 うん。

高木は食べかけのアイスを食べ終え、ゴミ箱に捨てて、部屋へ戻ろうとする。ゴミ箱に入ったCDに気づき、手にする。

高木 あれ、これって小林さんのだよね。

吉本 ああ、そうだね。

高木 大丈夫かなあ。

高木の手にある「ヌガー・グラスセが溶けるまで」のCDを映し出し、暗転。

シーン4

落ち着きのない様子でソファに座っている直政と、お菓子の補充や清掃を行う近藤。直政は私服姿であり、仕事でないことがわかる。

近藤 やっぱり今日はダメみたいですね。

直政 あ、そうなの。

近藤 忙しいらしいですよ、やっぱ。どこもかなりやられてるみたいだし。

直政 へえ。

近藤 朝ニュースでずっとやってたじゃないすか。倒壊、倒壊って。

直政 あーそう。

近藤 見てないんすか？ニュース。

直政 そんな余裕ねえよ。

近藤 あ、そうすか。

直政 まあでも大丈夫でしょ、とりあえず、あれくらいだったら。

近藤 まあ多分。

直政 壊れるんだったら、ドーンと壊れてくれてもいいしね。いろいろガタ来てんだし、せっかくだし、全部新しくするか。

近藤 大変じゃないすか。

直政 いいんだよ、金ならいくらでもあるんだから。

近藤 女将さんでしょ。

直政 当たり前だろ。おれに金なんてねえよ。

近藤 そんな自信満々に言われても。

直政は仕事を続ける近藤を見て、

直政 てか、そんなやんなくていいって。どうせ今日は新しい客も来ないんだから。

近藤 直政さんと違って、僕は一応、勤務時間中ですからね。

直政 いいよ、お前も今日は休めって。

近藤 いやですよ。

直政 暇なんだから、どうせ。おれが許す。

近藤 そんなこと言って。女将さんに怒られますよ、また。

直政 なんておれが怒られないといけないのよ。おれ兄、あいつ妹。

近藤 あーはいはい。

スマホのバイブ音が鳴る。直政はスマホを見て、

直政 うわあ…ヤバイよ、ヤバいって…。

近藤 借金ですか？

直政 うん…ああどうしよっかなあ…ねえ、どうしたらいい？

近藤 取った方がいいんじゃないすか？

直政 あ、うん、そうだよね。

躊躇いながら、スマホに向き合う直政。近藤は上手から出ていこうとする。

直政 ちよちよ、どこ行くの？

近藤 雪かきしにいくんですけど。

直政 なんでよ。

近藤 昼までにやっといってって、女将さんに言われたんで。

直政 いいから、そんなの。ちよっところいてもらっつていいかな。

近藤 いやですよ。

直政 頼むから頼むって。

近藤 えー。

直政は強引に近藤をその場に止まらせ、電話を取る。

直政 あの、もしもし…はい…はい…あ、はい…あの昨日はちよっど途中で、あの電話を取れなかつたんですけど…あ、はい、折り返しお電話できたらよかったんですけど、この大雪じゃないですか？それでちよっど屋根が一部壊れまして、

うだうだと話す直政に付き合いきれなくなり、近藤は上手から出ていこうとする。直政はそれに気づき、なんとか近藤を引き止めようとする。側にいてほしい直政と近藤のせめぎ合いがはじまる。

直政 その対応もあつたりして、てんてこまい…はい、はい…もちろんです、はい、最優先事

項です…あ、そうですよね、あの…ちょっと当てが外れてしまって、ちょっと待ってもらえたらうれしいなと思ってたりするんですけど…え、いや無理ですよ、なんでそんな話になるんですか。

話に気をとられた瞬間、近藤は部屋から出て行ってしまおう。

直政 ……そうですけど、でもそれは謝ったじゃないですか。信用を損なうことをしてしまって申し訳なかったと思ってますって…いや50万も無理ですよ、明日までは用意できませんって…いやもちろん結蔓には説得してるんですけど、今回はちょっと難しそうで…いやもうそんな怖いこと言わないでくださいよ。…いや無理ですって、明日は。あ、ちょっと待って、ちょっと。

電話が切れる。放心状態の直政。下手奥からいつの間にか、三木が入ってきている。

三木 ……大丈夫ですか？

直政 え。あ、すみません。

三木 ああ、いえ。

直政 あの…聞いてました？

三木 はい、少しだけ(笑)。

直政 すみません。

三木 なんか大変そうですね。

直政 まあ、はい…。本当すみません。

ばつが悪い様子で、直政は上手から出ていこうとする。

三木 出しましょうか？

直政 え。

三木 いくらですか？借金。

直政 え、いやいや。

三木 本当です。出しますよ、ウチの会社から。いくらですか？

直政 え、なんでですか？

三木 結蔓を説得してほしいんです、再デビューするように。それができたら、いくらでも払いますよ。

直政 え、あの…え。

三木 結蔓を再デビューするように説得してくれたら、出します、借金、全部。

直政 え、あの…800万とかって…

三木 はい。

直政 いけますか？

三木 問題ないです。

直政 来週の月曜までなんですけど…

三木 大丈夫です。

直政 それと、明日までに50万も必要で…

三木 すぐに手配します。

直政 マジすか。

三木 マジです。

直政 マジすか…。

三木 マジです。

直政 マジすか…。

三木 今日までにお願いたいんですけど、できますか？

直政 え、今日までですか？

三木 はい、すみません、ちょっと急で。

直政 ああいや。

三木 ちょっと事情があつて、私が明日、帰るまでに説得できなかつたら、再デビューの話がなくなっちゃうんですよ。それで私も切羽詰まつて…。

直政 そうなんですな。

三木 難しいですか？

直政 いや大丈夫です、やります。やります、絶対に。

三木 ありがとうございます。多分、もう私がなに言ってもダメなんですよ。朝話せたんですけど、なんにも考え変わってないみたいだったし。

直政 そうなんですな。

三木 だから直政さんだけが頼りなんですよ。一応、今日10時に結憂と最後に話す時間はもらったんですけど、多分無理だと思っただけ。

直政 あの大丈夫です、おれが絶対に説得します。

三木 ありがとうございます。

直政 ああ、いやこちらこそ。

三木 で、どうしますか？

直政 え。

三木 どうやって結憂を説得してくれますか？

直政 あ、そうですね…。

三木 なにかないですかね？いい方法。

直政 あー、そうですね…。

三木 私もいろいろ手は尽くしたんですけど。

直政 うーん…

三木 なにか弱みとか。

直政 うーん：あ、あの、結憂って、15で東京行つてからほとんど母さんに会ってなかったんですよ。死に目にも会ってなくて、それすごい負い目を感じてるんですよ、ずっと。

三木 へえ。

直政 それ多分あいつの一番弱いところだと思うんですよ：なんであの、なんか使えないかなと思つたんですけど。

三木 じゃあ結憂って、お母さんの最後の言葉は聞いてないんですよ？

直政 ああ、はい。

三木 最後に結憂に言葉を残してたとかどうですかね。

直政 言葉ですか？

三木 歌手に戻りたくないような言葉を言つてた、とか。

直政 はいはい。

三木 夢だった歌手としてずっと歌い続けて、たくさんの人に夢を与えてあげてほしい、結憂は私の誇りだ、みたいな。

直政 いいと思います、それ。

三木 ですよ。

直政 あいつにとつて、聞けなかった母さんの言葉っていうのは特別なはずなんで、それに応えたいって絶対思います。

三木 じゃあ、それをお願いします。

直政 まあ本当は言っていないんですけどね。結憂には好きなように生きていってほしいって、ずっと言つてたから。

三木 いいですよ、本当かどうかは別に。

直政 ですよ。

三木 もうそんなこと言つてられないので。

直政 はい。

三木 だからそれで無理だったら、戻らないと死ぬ、とか言つて説得してもらつていいですか（笑）。

直政 もちろんですよ。任せてください（笑）。

齊藤が上手から入ってくる。

齊藤 あ、こんにちは。

三木 こんにちは。

齊藤 昼食のご準備できましたので、ご都合がよろしいときに、お食事処までお越しください。

三木 すみません、お昼まで用意していただいて。

齊藤 今日外に出られませんし、これくらいはサービスさせていただきます。

三木 ありがとうございます。

直政 裕次くん、女将ってどこいるかわかる？

斉藤 あー、さっきは事務作業してましたけど。

直政 ああ、そう。

斉藤 あ、三木さん、昨日の話なんですけど…。

三木 あ、ダメだったんですよね？

斉藤 はい。

三木 結憂に言われました、いろいろ余計なこと言ったでしょって。

斉藤 そうですか。

三木 はい。

斉藤 本人の意思はやっぱり固いみたいで。

三木 そうですよね。

斉藤 はい。

三木 お話しいただいて、ありがとうございます。

斉藤 ああいえ。

三木 私は最後まで諦めませんが（笑）。

斉藤 あ、そうですか。

三木 はい（笑）。あ、もう行っても大丈夫ですか？

斉藤 あ、はい。よろしければ、ご案内しますよ。私もちょうど向かうところだったので。

三木 あ、そうですか？

斉藤 はい。

三木 じゃあ直政さん、また後で。

直政 あ、はい。

1人になる直政。少し考えた後、意を決したように、上手から出ていこうとする。そこに結憂が上手から入ってくる。突然現れたことに驚きながらも、平静を装い、

直政 おお、おはよう。

結憂 おはよう。

直政 忙しい？

結憂 いや今日は全然。お客さんも少ないし。

直政 あ、そうだよね。あの…それで、昨日の話なんだけど…

結憂 やっぱりその話？断ったじゃん、それは、自分でなんとかしてって。

直政 うん、そう、だから自分でなんとかするから、大丈夫だって伝えようと思って。

結憂 え。

直政 あの、おれ考えたんだよ、昨日話した後。このままじゃおれダメだって。だから結憂の力に頼らずに、自分で解決しようと思って。

結憂 え、いや、どしたの、いきなり。

直政 ほんと情けないなあと思って。ずっと結憂に甘えっぱなしで、苦労ばかりかけて、兄らしいことはなんにもできてなくて。本当ごめん。

結憂 いや、え、本当突然なに。

直政 おれ変わりたんだよ。母さんにも結憂のこと頼むって言われてたのに、逆に迷惑かけてばかりで…おれがんばるから、母さんにも安心してもらえるように、ちゃんとやっていくから。結憂にもこれまで苦労かけた分、ちゃんと返していきたいと思ってるし。

結憂 いや別に、私のことはいいんだけど。

直政 本当ごめん。

と、真剣さを感じさせる装いで、頭を下げる直政。

結憂 ……え、本当なの？

直政 うん、本当。

結憂 うそじゃないの？

直政 うそじゃないって。

結憂 え、信じていいの？本当に？

直政 うん。そりやすぐには信じてもらえないかもしれないんだけど。でもがんばるから。

結憂 ……。

頭を下げ続ける直政を見る結憂。要領を掴んできたのか、直政の芝居には熱が入っていく。

結憂 …じゃあ…わかった、信じてあげる。

直政 ありがとう。

結憂 お兄ちゃんからそんなこと聞いたの、はじめてだし。

直政 うん(笑)。

結憂 でも大丈夫なの？800万でしょ。

直政 うん、大丈夫、ちゃんと少しずつ返していくし。

結憂 すぐに返さないと殺されるって言ってたじゃん。

直政 そう言ったら出してくれるかなと思って(笑)。

結憂 やっぱり。

直政 まあだから、結憂もこれからは頼ってくれていいから、おれのこと。

結憂 まあうん、考えとく。

直政 歌手に、戻ってくれていいし、「あだちや」のことなんか気にしないで。

結憂 え、なんで？

直政 おれ、本当に悪かったと思ってて。ここを継がないといけなくて、結憂の夢を途切れさせ

てしまったこと。おれが頼りなかったから。でもいまは裕次くんもいるし、おれもがんばるし。だから結憂には心配せずに、歌手に戻ってもらおうと思って。

結憂 そんなの別に、お兄ちゃんが気にすることじゃないよ。

直政 いやでもお前、ほんとは戻りたいだろ？あんなに毎日毎日、歌もギターも練習して、たくさんの人に歌を届けたいって、がんばってたじゃん。

結憂 そんなの昔のことだよ。もう歌手にはなれたから。私はもういい。やれることはやったから。

直政 それに、結憂が歌手として歌い続けることは、母さんの願いでもあるんだよ。

結憂 え。

直政 最後に言ってたんだよ、足立結憂は、私の誇りだって。だから「あだちや」のことは気にせず、結憂には夢だった歌手として、ずっと歌い続けてほしいって。たくさんの人に夢を与えてあげてほしいって。

結憂 え、なにそれ。

直政 ごめん、本当は結憂に伝えてくれて言われてただけ。ずっと言えなくて。

結憂 いや、え、なんで？

直政 無理だって思ったんだって、おれがここを継いで、続けていくなんて。だから結憂がやるって言ったから、言ったらやめちゃうんじゃないかと思って、それで言えなくて…。

結憂 いや、ちよつと待って。そんなことお母さんが言うわけないでしょ。だってお母さんはずっと反対してたんだから、私が歌手でいることに。

直政 ごめん、結憂には隠してたんだけど、母さん、ずっと、結憂のこと応援してたんだよ。

結憂 うそだ。

直政 うそじゃないって。○○が出たら絶対買ってたし、結憂が出た番組は欠かさず観てたし、実はライブにもこっそり行ってたんだぜ。

結憂 うそだ。そんなの私知らないんだけど。

直政 ごめん。結憂には絶対に言うなって口止めされたから、言えなくて。

結憂 いやなんで。

直政 反対した手前、素直になれなかったんだよ。そんな姿、誰にも見せないようにしてたし。

結憂 なんで。

直政 がんこだったから、あの人。

結憂 …本当なの？

直政 うん。だっておれずっと母さんの近くで、それ見てきたから。

結憂 じゃあなんで…なんでもっと早く言ってくれなかったのよ。

直政 ごめん…

結憂 生きてるうちに言ってくれてたら…

直政 だからおれ、遅くなっちゃったけど、やっぱり母さんの願いを、叶えてやりたいんだよ。おれもがんばるから、だから結憂も、母さんの最後の願いを叶えてやってくれよ。

結憂 そんなこと言われたって、私は…

直政はギターを手にし、力強く結憂の前に掲げる。

直政 歌ってくれよ、また。

結憂 いや、でも…

直政 みんなお前の歌を、信じて、待ってるから。

結憂 でも、私は…

直政 母さんもきつと見てくれるから。結憂ならきつとまた、たくさんの人に夢を与えてくれるって信じて。

結憂 …。

直政 7年も待たせちゃったけど。でも、ずっと待ってる。

直政の圧に押され、結憂はギターを手にする。

結憂 …。

リュックを背負った小林が、下手奥から入ってくる。ギターを手にした結憂を見て、

小林 え。

直政 あ、小林さん、見てください、足立結憂が、歌手として戻ってきました。

小林 え。

直政 足立結憂が、歌手に復帰しますよ。

結憂 いやちよつと。

小林 え、本当ですか？

直政 はい。

小林 うそ。

直政 どうなんでしょう？

結憂 え、いや、それは…

吉本と高木が上手から入ってくる。

吉本 え。結憂ちゃん、ギター持ってる。

高木 うそー。

結憂 あのこれは…

吉本 え、え、え、どうしたんですか？

直政 どうしてだと思えます？

高木 え、なんでですか。

直政 足立結憂、歌手に復帰します。

高木 え、うそー。

結憂 もう、ちょっと。

直政 まあまだ決まったわけじゃないんですけど。

吉本 なんだ（笑）。

直政 でも考えてはいるんだよね？

結憂 それはちょっと、わかんないけど。

直政 え、考えないの？

結憂 いや…考えないわけじゃないけど。

高木 えーじゃあ可能性はあるってことですか。

直政 まあまだ考えてるっていう段階ですけど。でも結憂が歌手として戻ってきたら、うれしいですよ？

吉本 それは当たり前じゃないですか。

高木 うれしいとかそんなじゃないですよ。夢です、夢。私の。

吉本 結憂ちゃんが歌う姿をまた見られたら、僕死んでもいいです。

高木 （笑）。

直政 小林さんも、うれしいですよ？

小林 あ、それは、はい、本当だったら。

直政 ほら、こんな言ってくれてんだよ。

結憂 あの、ありがとうございます。

直政 結憂、「あだちや」のこと心配してるんですよ。自分がいなくてもやれるのかって。

吉本 ああ。

直政 ああってなんですか（笑）。

吉本 直政さんには任せられないですよ。

高木 まあでも、これからは斉藤さんに任せてもいいですしね。

直政 いや僕、心入れ替えたんですよ。結憂の力になれるように、全力でがんばっていきこうって。

高木 えー。

直政 えーってなんですか。

高木 （笑）。

吉本 でも僕うれしいです。結憂ちゃんが歌手に戻るってこと、考えてくれてるんだってだけで。

高木 私も。もう完全に諦めちゃったので、雑誌でもう戻ることはないって言ってたから。

吉本 ああ、もう絶対ないんだ、と思ってたもん。

高木 まだ楽しみに待っていていいってことでももんね。

直政 あ、でもまだ決まったわけじゃないので、外では言わないでもらいたいですけど。

高木 もちろんですよ。

吉本 絶対に言いません。

高木 今日来られてよかったです、本当に。

吉本 ね。

輪の外側から会話を聞いていた小林が、突然声を上げる。

小林 あの、どうしてですか？昨日はあの、あんなこと言ったのに、どうしてですか？

結憂 すみません、昨日は。少しおかしなこと言ってしまいましたよね。

小林 はい。

結憂 すみません。

小林 本当はなんなんですか？え、戻ってくるんですか？足立結憂は。

結憂 あの、まだわからないんですけど。

小林 戻ってきてください。あの、お願いなので、戻ってきてください。

結憂 えっと。

小林 足立結憂が戻ってきてくれたら、大丈夫なので。私は信じられるので。だから、お願いなので、戻ってきてください。戻ってきてください。

吉本 いや小林さん、そんなに言ったら結憂ちゃん困りますよ。

小林 あの、私、わからなくなっちゃったんです、足立結憂が本当はなんなのか。でもまたあのときみたい私のために歌ってくれるんだったら、私は信じられます。だからお願いなので、戻ってきてください。戻ってきてください。

小林は結憂に向かい、必死に懇願する。その姿に結憂はなにも言えず、

結憂 …あの…がんばります。

小林 …また歌ってくれるんですか？私は信じてもいいんですか？

結憂 …がんばります。

小林 ありがとうございます。ありがとうございます。

直政 よかったですね、小林さん。

小林 よかったです。よかったです。あ。

小林は昨日ゴミ箱に捨てたCDを探し回る。

直政 どうしたんですか？

小林 あの、CD見てないですか？

高木 あ、それ私、持っています。

小林 え。

高木 会ったら言おうと思ってたんですけど、昨日の夜拾ったので、私一応預かっておきました。

小林 え、そうなんですか、よかった、ありがとうございます。

高木 大切なものだと思ったんで。

小林 そうなんです。ああ、よかった、よかった、ありがとうございます。

高木 私も念の為、取っておいてよかったです。

小林 あのすみません、昨日、私、なくしちゃって…でも…あの、もう絶対になくしたりしないので、あの、本当にすみません。

結憂 いえそんなの全然。

小林 どこにありますか？

高木 あ、私の部屋に置いてます。

小林 あの、行ってもいいですか。

高木 ああ…はい大丈夫ですけど。

小林 あの、すぐに取りってくるので。

結憂 はい。

小林 ありがとうございます。本当によかったです、本当にありがとうございます。

高木 ああ、いえ。じゃあ、ちょっと。

吉本 ああ、うん。

小林 あの、すぐに取りってくるので。

小林と高木は下手奥から出ていく。

吉本 やっぱなんか、すごい人ですね、小林さん。

直政 そうですよ。

吉本 あの、さっき大丈夫でした？小林さんに強引に迫られてましたけど。

結憂 そんなの全然。

吉本 僕もなんか、すみません。あの僕らの言ってることなんか、本当、全然気にしなくていいんで。こいつらまたなんか言ってるわ、くらいに思ってもらえれば。

結憂 あ、はい(笑)。

吉本 あの、結憂ちゃんが幸せでいることが、僕らの幸せなんです。だから結憂ちゃんは、やりたいうことをやりたいようにやってくれれば、それでいいんで。それが僕らの幸せなんです。

結憂 ありがとうございます。

吉本 (結憂が持っているギターを指し) あ、それ重くないですか、ずっと持ってた(笑)。

結憂 あ、そうですね(笑)。

結憂はギターをギタースタンドに戻そうとする。

直政 久しぶりじゃない？そうやってギター持ったのって。

結憂 ああ、そうだね。しばらく、ちゃんと触ってなかったかも。

直政 なつかしいよなあ。昔ここでコンサートみたいなことしてたんですよ、みんなで。あれ楽しかったよなあ。

結憂 お兄ちゃんは途中からいなくなっちゃったけどね。

直政 だって全然うまくならないからさあ。

結憂 練習しないからでしょ。

直政 才能がなかったんだって。でも結憂はやっぱすごかったんですよ、結憂の歌聴きたくて、ここに入りきれないくらいの人来てましたからね。

吉本 観ました、僕、YouTubeでその映像。

直政 え、そうなんですか？

吉本 デビューのきっかけになったってやつ。

直政 あ、あのときのね。

吉本 僕らファンは多分みんな観てます（笑）。

直政 そうなんですね（笑）。

吉本 はい。

直政 あ、久しぶりに弾いて、歌って見たら？

結憂 え。

直政 いいじゃん。再スタートってことで、原点に戻って。あの頃の気持ちで。

結憂 いやそれは。

直政 あ、なにかリクエストありますか？

吉本 いや僕はそんな。

直政 じゃあ「ヌガー・グラスセが溶けるまで」とかどうですか？小林さんがずっとCD持っているから（笑）。久しぶりに聴きたいなと思ったんだけど。

結憂 ちょっと待ってよ。

直政 忘れちゃった？

結憂 そういわげじゃないけど。

直政 いいじゃん、じゃあ、そんなケチケチしなくても。

結憂 そういふんじゃないけど…

直政 じゃあ聴かせてよ、久しぶりに。

直政は強引に結憂を座らせ、演奏するように促す。

結憂 …。

ギターを手に、硬直する結憂。

結憂 …。

直政 …どうしたの？

結憂 いや……ごめん、やっぱりそろそろ仕事戻らないと。

直政 なんだよ。

結憂はギターをギタースタンドに戻し、下手奥から出て行くこととする。

直政 歌手には戻るんだよね？

結憂 ごめん、私やっぱり…

直政 え？

結憂 …できない。

直政 え、なんで。

結憂 …できないのよ、もう私には。

直政 だからなんで。

結憂 …。

直政 いいの？母さん裏切っても。

結憂 ごめん。

直政 いいの？裏切っても。

結憂 …（吉本に）ごめんなさい。

吉本 …。

直政 おいちよつと。

結憂 …ごめん。

直政 …できないってなんだよ。

結憂は下手奥から出ていく。残された直政と吉本。

直政 …なんなんですかね、本当は歌手に戻りたいはずなのに。

吉本 …。

直政 これもうちよつとだと思っただけですよ。もうちよつとで戻るって言うと思っただけですよ、あいつ。あ、みんなで話しません？足立結憂を待ってるって。高木さんと小林さんも誘って。

吉本 あの…僕はいいです。

直政 え、なんでですか？足立結憂の歌、また聴きたいですよ？

吉本 それはそうですけど。

直政 そうですよね。そうですよね。

吉本 僕もそりゃ、結憂ちゃんがまた歌う姿を見られたらうれしいですけど、でも、それは、結憂ちゃんが本当に戻りたいって思ってたじゃなかったら意味がないと思うんです。だって、じゃないと結憂ちゃんは幸せじゃないと思うし、だったら僕は幸せじゃないし。

直政 え、じゃあ吉本さんは、もう2度と足立結憂が戻ってこなくてもいいんですか？

吉本 いいです、僕はそれでも。結憂ちゃんがそれを望まないんだったら。

直政 いやいや、え、なんですか？それ。そんなかつこつけないでもいいじゃないですか。戻ってほしいんだったら、素直にそう言いましょよ。

吉本 だって、さっき苦しそうだっただじゃないですか。僕はあんな顔で結憂ちゃんが歌っても、うれしくないんですよ、やっぱり結憂ちゃんにはずっと笑っててほしいんですよ。

直政 いや、やめましょよ、そういうの。

吉本 僕にとって結憂ちゃんは、本当に大切な人なんです。だから僕らのために、足立結憂として歌わなくてもいい、ただ自分のために、幸せに生きていってくれてればそれだけでいい。僕は本当にそう思ってます。

直政 ……あの…ただのファンですよ？

吉本 ただのファンですけど。

直政 なにも知らないただのファンが、なんでそんなにえらそうに語れるんだって思いませんか？

吉本 思いませんけど。

直政 えーなんで。

吉本 だって大切に思う気持ちは本当だから。

直政 えーマジで気持ち悪いっす。

吉本 気持ち悪くてもいいです、別に。

直政 あ、そうですか。

吉本 はい。

直政 ……

吉本は下手奥から出て行こうとする。

吉本 直政さんには、大切な人はいないんですか？

直政 えー。

吉本 さみしいですね。

吉本は下手奥から出ていく。

直政 ……いないかあ。

しばらくして、下手奥から〇〇を手に、小林が急いで入ってくる。

小林 あれ、足立結蔓、さんは？

直政 ああ、もういないですよ。

小林 あ、そうなんですか。急いで取ってきたんですけど。

直政 どっか行っちゃいましたか？

小林 あの、どこに行きましたか？

直政 わかりません。

小林 え。

直政 わかりません。

シーン5

夜の10時前。三木が1人、電話で話している。

三木 大丈夫です。絶対に足立結蔓は戻ってきます。…はい、まだ返事をもらえたわけじゃないですけど、もうすぐなので…いやでも、ここで足立結蔓を切ってしまった方がいいんですか？…あれ以上のアーティストをまたイチから見つけられるんですか？…いややります、私だってやっていますよ。でも足立結蔓の代わりなんていないじゃないですか。あれからいくら探したって、いなかったじゃないですか。…だから私だって努力しています。でもどこにもいないんですよ。…はい、明日必ずいい返事をお話させていただきます。…はい、おつかれさまです。

直政が上手から入ってくる。

三木 あ、ちょっとどこにいたんですか？

直政 いやいろいろいましたけど、今日休みだったんで。

三木 あ、そうなんですか。

直政 はい。

三木 で、どうだったんですか？

直政 ああ。

三木 結蔓を説得してくれましたか？

直政 うん。

三木 それで？

直政 (札束を見せ) 50万とってきた。

三木 は？

直政 金庫から50万とってきた。

三木 どういうこと？

直政 そのままですけど、おれは金庫から50万とってきた。

三木 意味がわからないですけど。

直政 あのさあ。800万なんておれにとっては端金なんだよ。あいつがどんだけ金持ってるか知ってます？毎年どんだけの金が入ってきてるか知ってます？あいつさえいけば、借金なんてどうとでもなるんですよ。うん。だから別にわざわざなんかする必要もないなあって思っちゃったんですよね。

三木 約束が違うじゃないですか。

直政 やるって言っただけでしょ、別に約束までしたつもりはないんですけど。

三木 そんな子供の理屈、通用するわけじゃないでしょ。

直政 いつまで経っても、おれは子供なんだよ。なんの取り柄もない、おれにはなんにもない。運が良かったのは足立結憂が妹だったってことだけ。だったらそれを一生利用して生きていくてやるよ。

上手から結憂が入ってくる。直政が手にした50万円の札束を見て、

結憂 え、どうしたの、それ。

直政 金庫から取ってきた、50万。

結憂 え、なにやってんの？

直政 金欲しかったからさあ、明日までにとりあえず返さなきゃいけないくて。

結憂 これからはちゃんとするって、言ったじゃん。

直政 嘘だよ、嘘。おれが本当になると思った？

結憂 え、なんでそんなの。

直政 三木さんをお願いされてたの。結憂を再デビューするように説得したら、借金全部払ってくれるって。

結憂 どういうこと？三木さん。

三木 …。

結憂 どういうことなの？三木さん。

三木 時間がないのよ。私は明日伝えなきゃいけないの、じゃないともう結憂をデビューさせられなくなる。だから手段を選んでる時間なんてないのよ。私はまたあなたと一緒に夢をみたいの。あの頃みた夢を、もう一度。

結憂 それは三木さんの夢でしょ。私はもうその夢は見られない。

三木 どうして。

結憂 私はもうできない。私はもう足立結憂として歌えないの。

三木 なんて。

結憂 …。

三木 歌手として歌を、言葉を、たくさんの人に届けることが、あなたの幸せじゃなかったの？
結憂 そうよ、でも違った。私はそれで本当に幸せにはなれなかった。

三木 幸せだったじゃない、あの頃の私たちは。それは嘘じゃないでしょ。はじめて東京ドームに立ったときの地鳴りのような歓声、新曲を発表したときの日本中が沸き立つ騒々しい景色。あれはあなたと私でつくったものでしょ。あの熱狂をあなたは忘れられるの？

結憂 夢はもう終わったの。

三木 終わらない、あなたが戻ってくれば、また夢は続くの。

結憂 だから私はもう無理なの、わかってよ。

三木 あなたは歌手でいなきゃいけないの。歌手としてたくさんの人に夢を与えることが、あなたの生まれた意味なの。

結憂 違う。私は誰かのために存在してるんじゃない。私は私の人生を生きるために、生まれてきた。

三木 あなたの人生ってなんなの？ここで生きていくことが、あなたの人生なの？

結憂 ……そうよ。

三木 なにそれ。

直政 もう諦めなつて、三木さん。そうだよな、結憂はここで生きていくって決めたんだもんな。

三木 あなたは黙ってて！

直政 いやですけど。あれ母さんの話も、嘘だからな。歌手として歌い続けてほしいなんて、別に言っていないし。気にしなくていいからな。

結憂 ……うそだったの？

直政 そうそう、三木さんが言えつていうから。だつてお前、そういうの弱いだろ？

結憂 ……

直政 だからここで生きていこう、一緒に。金ならいくらでもあるんだからさ、のんびり生きて、死んでいこうぜ（笑）。

結憂 ……

三木 これがあなたの求めてる人生？こんな人にたかられながら生きることが、あなたがやりたかったこと？

結憂 ……

三木 本当にどうしようもない。

結憂 ……

三木 幸せなの？

結憂 ……

三木 あなたはいま、幸せなの？

結憂 ……幸せよ、私は。

その言葉を聞き、三木は笑い出す。

結憂 なにおかしいの？

三木 じゃあもう終わらせましょうよ、ちゃんと、足立結憂を。誰もあなたを望まない、あなたに期待しない、そういう世界にして、終わりにしましょうよ、足立結憂を。

リュックを背負い、小林が「ヌガー・グラッセが溶けるまで」のCDを手にも、下手奥から入ってくる。三木はそのCDを目にして、

三木 ちょっと貸して（と、強引に小林からCDを取り上げる）。

小林 あ！

三木 ねえ、この歌は誰がつくったの？

小林 返してください。

三木 答えて。この歌は誰がつくったの？

三木はCDを結憂の足元に投げつける。

小林 あ！

三木 答えて！

小林はそのCDを拾い上げ、大事そうに抱える。

結憂 ……私じゃない、誰か。

小林 ……え。

結憂 私が書いた歌じゃない。

小林 ……どうということ。

三木 そうよね。これは誰かがあなたのために書いた歌。あなたから生まれたメロディじゃない、言葉じゃない。

結憂 ……

三木 あなたはもう誰かに伝えたいことなんて、なくなっちゃってたんだから。でもそれでもよかった。あなたから生まれたものじゃなくなっちゃって、あなたがあなたから生まれた言葉として歌えば、本物になる。たくさんの方がその言葉に涙し、熱狂する。それでよかった。それで私は幸せだった。

結憂 私は…耐えられなかった。偽物の言葉を歌う自分に。

三木 偽物なんかじゃなかった。かたちが変わっても、足立結憂は本物だった。だってこの歌はあなたの最大のヒット曲になった。日本中で数えきれない感動を、この歌は与え続けてきた。
結憂 ……

三木 でも…もう終わりにしましょう。全部、すべてを、足立結憂を。

結憂 ……わかった。

小林 ……偽物だったの？

結憂 ……。

小林 足立結憂は、私に歌った言葉は偽物だったの？（CDを指し）これは…

結憂 うん、そう。

小林 偽物だった…

結憂 ごめんなさい。

小林 偽物だった…偽物だった…足立結憂は…私のための言葉は…

結憂 ごめんなさい。

小林 偽物だった…偽物だった…

小林は狂ったように、奇妙な動きをはじめめる。

小林 偽物だった…偽物だった…私の本物は偽物だった…私の本物は…

頭の回路がプツツと切れたように、小林は倒れる。

結憂 あの、大丈夫ですか？

小林 ……。

結憂 大丈夫ですか？

小林 ……。

結憂 ねえ、ちょっと手伝って。

直政 ああ、うん。

結憂 大丈夫ですか？

結憂と直政は小林に近づく。

三木 ……終わりよ、もう全部。

シーン6

倒れた小林だけが舞台上に残される。吹雪の音がどんどん強くなり、弾けるように、消え去る。張り詰めたように、無音の室内。小林がゆっくりと起き上がり、ポケットからスマホを取り出し、電話をかける。

小林 寝てた? :うん、そうだね、久しぶり。 :うん、元気だよ。 :生きてるよ、ちゃんと私は :うん、あの、伝えておこうと思って。 あのね、私、お母さんのこと恨んでないから、もう。 :うん、本当。 昔のことだもん。 誤解してたら嫌だなと思って。 そんなのもう、昔のことだから :なんで泣いてんの? いいのよ、もう本当に。 たいしたことないもん、いまとなっては :うん、それだけ :うん、じゃあおやすみ。

電話が切れる。

小林 :私は、足立結憂を殺すよ。

小林はずっと持っていたリュックを開ける。 下手奥から、高木に先導され、手紙を持った吉本が入ってくる。

高木 あれ、小林さん。

小林 こんばんは。

高木 大丈夫なんですか? 倒れたって聞いたんですけど。

小林 はい、全然。 たいしたことじゃなかったです。

高木 だったら、よかったです。

小林 はい、よかったです。 どうしたんですか?

高木 結憂ちゃんに手紙渡そうと思って、探してるんですけど。

吉本 だから明日でいいって、おれは。

高木 えーでも今日渡したいんでしょ。

吉本 うん、まあそうだけど。

高木 なんて早く渡しとかないかなあ。

吉本 なんかちよつとタイミング逃しちゃって。

高木 もう日付変わっちゃうよ。

吉本 ああ、うん。

高木 じゃあ行こう。

小林 足立結憂を探すんですか? これから。

高木 はい。

小林 いないかもしれませんが、もうどこにも。

高木 え。

小林 どこにもいないんじゃないですか。

吉本 どこか行っちゃたんですか?

小林 そもそもいなかったんじゃないかって、足立結憂なんて、はじめから。

高木 :どういう意味ですか?

小林 …見つかるといいですね。

吉本 あ、はい。

小林 見つかるといいですね。

高木 …じゃあ行くよ。

吉本 うん。

吉本と高木が上手から出て行くとする。小林はリュックのなかを見ていて、

小林 あの、やっぱりもう少しここにいませんか？

高木 え、なんでですか？

小林 いや、ここにいたら来るかもしれないので。

高木 いやいいです。

小林 ここにいてください。

高木 だからなんですか？

小林 ここにいたら、来ると思うので。

高木 そんなことわからないじゃないですか。

小林 わかるんです、私には。

高木 なんて。

小林 だってわかるから、私には。

吉本 おかしいですよ、小林さん。

小林 じゃあついていいですか？私も。

高木 意味わかんないですよ。

小林 ついて行きます。

高木 やめてください。

小林 一緒にいてください。

高木 だからやめてくださいって！

小林 …

高木 おかしいです、小林さん。気味悪いです。

小林 …おかしいですか？私。

高木 はい。

小林 おかしいんです私、生まれたときから。

高木 …

小林 覚えててください、私のこと。

高木 …

小林 …見つかると、いいですね、足立結憂。

高木 …行こう。

高木と吉本は上手から出ていく。小林はまた1人になる。木が軋むような音が鳴り始め、徐々に大きくなっていく。

小林 足立結憂は偽物だった。(CDを指し)ここに書かれている言葉は偽物だった。彼女の本当はここにはなかった。許せない。彼女はずっと私を騙していた。だって偽物をずっと本物だとして信じ込まされていたんだから。でもはじめから偽物だったんだとしたら、殺す意味ってなに？ いやでも、やるんだ。やらないと。私のすべてが偽物で覆い尽くされてしまう。じゃあ私が死ぬばいじゃない。(リュックにしまっていた包丁を手にして)偽物で覆い尽くされてしまう前に。

小林は包丁をじっと見つめ、力を込める。

小林 ダメ、それじゃあ。だって、だったら、私が生まれてきた意味ってなに？偽物に殺されるため？そうじゃない。そうじゃない。やれ、やるんだ、偽物に殺される前に。偽物に殺される前に。私は、足立結憂を、殺す。

結憂が下手奥から入ってくる。小林は包丁を手に、背中越しで結憂と会話をする。

結憂 小林さん、もう大丈夫なんですか？

小林 あ、はい。ご心配おかけしてすみません。

結憂 ああ、いえ。とくになにもなかったんだしたら、よかったです。

小林 はい。

結憂 (軋む音の方を指し)これ、うるさいですよ。

小林 ああ、いえ。

結憂 一応、直してはみたんですけど、やっぱりダメだったみたいです。簡単には直らないですね、壊れちゃったら。これからまた見てみようとは思ってますけど。

小林 はい。

結憂 …あの、申し訳ありませんでした。さっきのこと。

小林 …。

結憂 私はみなさんの思っているような人間じゃなかったんです。みんなの期待する足立結憂を演じ続けるために、最後は自分の言葉まで誰かに譲り渡してしまった。そんなよこしまなこと今まで手を染めてしまう、そんな人間だったんです。

小林 …。

結憂 みんなを騙していることが本当に苦しかった。でもそれ以上に怖かったです。そんな人間だったんだと、知られるのが。愛してくれた人たちが私を非難して、離れていってしまうのが。だから足立結憂をみんなの記憶のなかの存在として、そのまま閉じ込めておきたかった。

小林 ……そうなんです。

結憂 私はもう歌えないんです。歌をどうやって歌えばいいかわからない。いつかちゃんと歌える日がくるかもしれないって思ってたけど、やっぱりダメでした。自業自得ですよ、借り物の自分で、借り物の言葉で歌うことを選んでしまったんだから。もうどんな自分で歌えばいいかわからない。

小林 ……

結憂 全部言おうと思います。全部知ってもらおうと思います。

小林 ……そうなんですか。

結憂 はい。(CDを指し)あのこれ、ずっと聞いてくれてありがとうございます。

小林 ……

結憂 (壁にかけられた時計を見て)もうすぐ明日ですね。明日は晴れるみたいなので。今日はゆっくりおやすみください。

結憂は深く、小林におじぎをし、上手から出て行こうとする。

小林 足立結憂さん。

結憂が振り返った瞬間、小林は手に持っていた包丁で足立結憂を刺す。足立結憂はゆっくりと、その場で倒れる。軋む音は膨張し、瓦解する。

小林 これが12月7日と8日の2日間、「あだちゃ」で起こったこと。そして足立結憂の最後。これがすべて。

小林は「ヌガー・グラスセが溶けるまで」のCDを抱きかかえ、冒頭と同じように、舞台中央に座る。時が止まったような幻想的な明かりに照らされ、ともに「山浦温泉 あだちゃ」で過ごした人物たちが登場し、その風景を演じはじめる。足立結憂はゆっくりと立ち上がり、その風景のなかに溶け込む。

小林 私はここに座っている。私は偽物に殺されなかった。私の人生に本物はなかったけれど、私はいまも生きている。どこに私の本物はあるの？いつか私は本物を見つけれられるの？ねえ、あなたたちの人生に本物はある？本物があるから、あなたたちはいま生きているの？ねえ歌って、本物の言葉で。

いつの間にか、他の人物は消え、舞台上には小林と足立結憂の2人だけになっている。足立結憂はゆっくりとギターを抱え、

小林 私が信じるのは、足立結憂。そしてあの曲。「ヌガー・グラッセが溶けるまで」。

足立結憂の手が動き始めた瞬間、流れていた音と幻想的な照明はプツッと糸が切れたように、途絶える。

終

【参考文献】

- 『ジョン・レノンを殺した男』（著：ジャック ジョーンズ、訳：堤 雅久）リポレポート
『ジョン・レノン最後の3日間』（著：ジェイムズ・パターソン、訳：加藤 智子）祥伝社
『ジョン・レノン 誰が彼を殺したのか』（著：レスリー・アン・ジョーンズ、訳：岩木 貴子）ヤマハミュージックエンタテイメントホールディングス